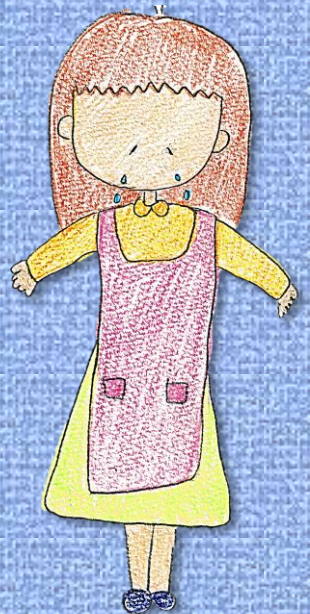
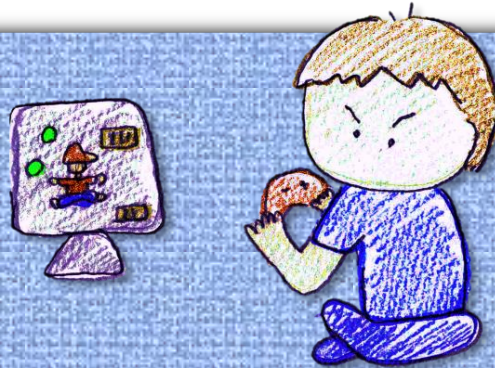


ゲーム・ネット問題の事例

経過

中学生から、高校生に上がると、急に勉強についていけなくなり、家に帰ってきては、オンラインのゲームにはまるようになる。生活のリズムが崩れ、部屋から出て来ない。父がゲームを取り上げたりWi-Fiを切ったりすると怒り出して、親としてどう対処していいか分からなくなってしまう。食事中も、ずっとスマホ見ているばかりで、何か話しかけたとしても、すぐイライラした様子で、食事と一緒にしなくなってしまった。そのような姿を見て、親としては不安がつのり、また声をかけても拒絶・反抗的な態度でどうしていいかわからない。学校も休みがちになり、とうとう不登校になってしまった。部屋からはチャットなのか、ゲームの中なのかわからないけれど、「死ね」「くそっ」「ふざけるな！」等暴言が目立つ。悪化しているように見えるこの状況を誰に相談していいかわからず、困惑していた。



背景

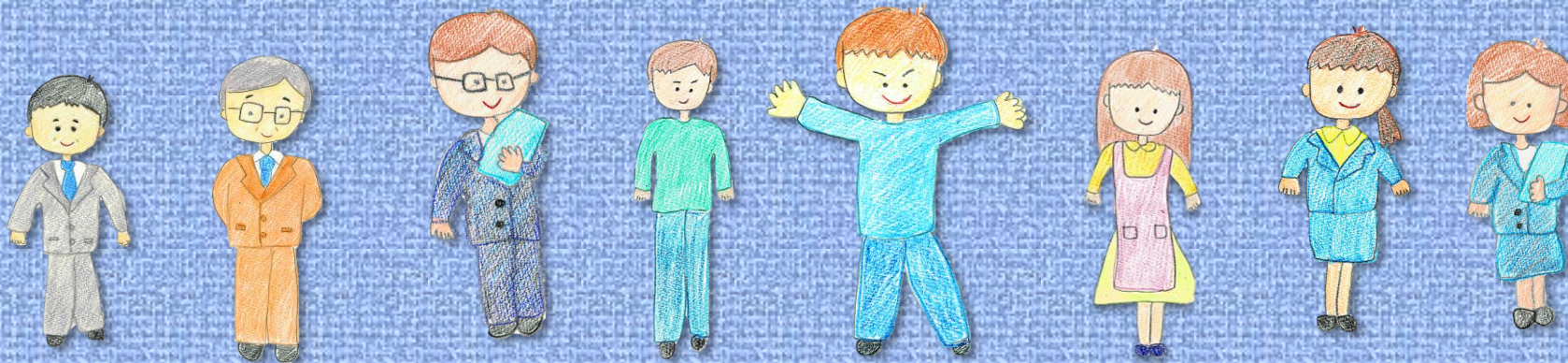
家族構成：父・母・本人（高校1年生）・弟（小学5年生）4人家族

父会社員・母パートで短時間勤務、経済的な困窮はない。母は困って学校に相談し、教員の事は信頼していた。父は子どもの教育に厳しく、成績が下がると子供たちを叱る。父と母はあまりコミュニケーションがとれておらず、子どもの事であまり話し合えない。本人は中学生まで成績は優秀。中学はサッカー部で3年間こなしていた。中学時代は友人も多く、対人関係のトラブルはなかった。



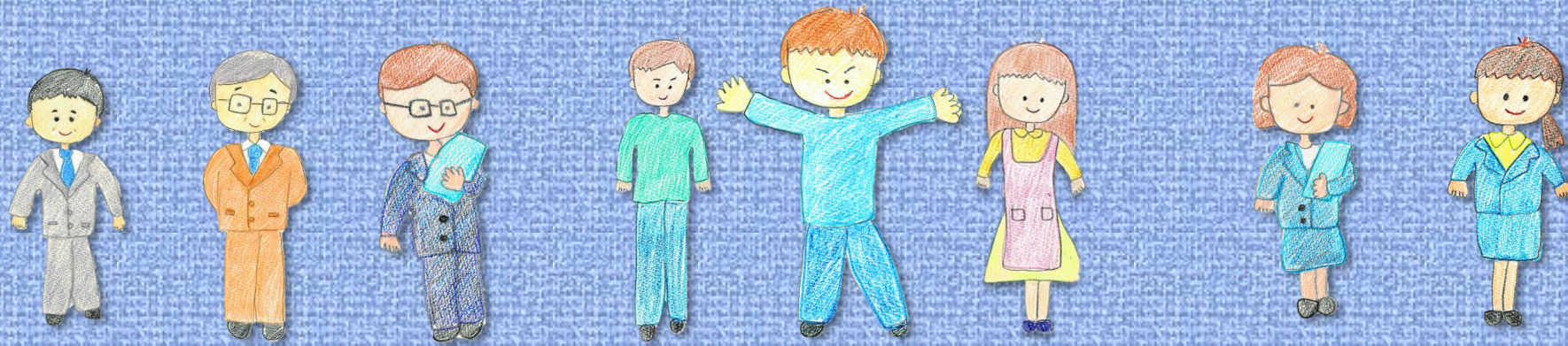
関わりー学校の内

欠席の連絡が続くようになり、担任がSCと保護者をつないだ。SCが主として保護者の相談を受け持ち、「本人の生きづらさの理解」に焦点をあて面接を開始。SCー教員ー保護者で情報共有をする。主に母親の語りからは「自分の育て方」について「罪悪感」が語られるが、誰・何が「問題」ではなく、母からみた率直な本人像を語ってもらう。またそこから見えてくる家族の「課題」を一緒に考えた。理解のネットワークを広げるためにSSWも介入する。学校でSC-保護者-SSWで顔合わせして、SSWによる自宅訪問を実施しながら、傾合いをみて、家で母・子・父のグループ面接を実施した。



関わり-学校の外

本人の被害的な言動が見られるため医療受診の緊急性（病理性：統合失調症等）が疑われたが、SSWが精神保健福祉センターに連絡して、状況を伝えて助言をもらったところ、緊急性はないと判断した。教員-SC-SSW-両親との支援会議を実施し、さらに「本人の理解」を深めて対応の在り方を模索する。生きづらさの背景に発達障害の可能性が垣間見えて、再びSSWより精神保健福祉センターに連絡して、医療機関を紹介してもらおう。医療機関が心理検査を実施し、SCが検査結果を通して本人をアセスメントして理解を共有した。教員-SC-SSW-両親-本人-医師-病院心理士との回復ネットワークが構築された。



保護者が担任とSC、そして本人が外部機関（医療）とつながり、本人の「いきづらさ」の理解が深まる。そこから、学校でできること、保護者としての関わり方を振り返り、生活の中での回復環境が整えられた。関係者の中で、本人の理解が深まることで、本人も「わかってもらえる」感覚が増して、少しずつ「生きづらさ」が本人から語れるようになった。さらにSSWの訪問にて、家庭での対話が促される。SCは学校の相談室にて保護者と面談、学校との情報共有を継続して、本人の困り事を、家族、学校で共有することができ（また、夫婦間の課題も「対話」で浮き彫りになり）、学校・家族全体のあり方が変化し始めた。

